

## 南方（ボルネオ）

北ボルネオの戦い

長崎県 大澤 泰雄

昭和十六（一九四一）年四月、久留米第十二師団工兵隊（久留米市御井町）に現役兵として入隊、第一中隊に配属されました。

同時に入隊した戦友の職業は炭坑の石炭運搬夫、石炭掘削夫、漁業の従業者等々でした。その中に全然スコップを持ったことのない私鉄の鉄道会社の事務職であった私が入隊したのですから、一期の検閲が終わるまでは、苦労の連続でした。

勿論、見習士官の任官を目標に、懐中電灯を手に勉強もベッドの中で、あるいは便所を一番勉強

できる場所にして努力を重ねました。

しかしながら私は本来、軍隊にむかない体質だったのか、毛布に皮膚が負けるのか、腰から下部が潰瘍になって一苦勞しました。仲間にも上官にも話すことはできないし独りで治療に専念するも後のまつり、遂に任官試験の意欲も断念せざるを得なくなり、班長に実状を申し出たところ意志薄弱だと叩かれましたが、下半身の皮膚の実状を見て驚かれ、即刻軍医に手配してくれました。軍医も症状のひどさに驚かれ早速、久留米陸軍病院に入院の手配をしてくれました。

久留米陸軍病院では看護婦さんの手厚い施しで十日もすると完治、即原隊復帰しましたが、すぐに再発、また入院する始末でした。幾度となく入

退院を繰り返すばかりで、軍人としては不適格だと認めざるを得ませんでした。

一期の検閲は、なんとか終えることができましたが、幹候は勿論、下士候の試験も断念せざるを得なくなった時の心境は、言葉にあらわすことは不可能でした。

一等兵でありながら「マキハン」は免除される特典を与えられたのも他に例はないでしょう。そして事務関係の業務に優遇されたことについては感謝のほかありませんが、時はすでに大東亜戦争に突入しました。

昭和十八年に現役兵を終えることになりましたが二カ月もしない期間に召集を受けました。

現役と同じ久留米第十二師団工兵隊に入営、目的地不明のまま僅か数日後に出発、博多の沖を出た二十一隻からなる輸送船団は、周囲を海防艦二隻三隻が警戒、空には飛行機が警戒する万全の体制でありました。

救命用の桐の丸太も着用しないで「出征兵士を

送る歌」を歌う。「アーアー堂々の輸送船。さらば祖国よ、栄えあれ……」。

対馬海峡で、周囲の島々をのんびり眺め、やがて昼飯の用意が始められようとしていた時、突然、後方船団の中心で大音響と共に、周囲の船団から一斉に警笛が鳴り響きました。

振り向くと、三、〇〇〇トン級の戦時型標準船が既に逆立ちで、積荷がバラバラと落下し、間もなく海中に沈没してしまいました。全く無想定にしなかつた瞬時の出来事に、慌てて先ほど支給された救命胴衣を着用し、私物をまとめました。しかしその後の来襲はなくて「ホッ」としましたが、こんな場所でやられるとは……。

船団の各船からは爆雷が投下されました。その爆発の影響で乗船の「タスマニヤ丸」の舵に故障が起き、舵の操作に変調が起き、止むなく人力操舵に切り替わりました。それで乗船部隊から使役が出て、船長室からの合図で後方操舵ハンドルを

回転させつつ進行していたのですが、遂に船団から離脱して三池港へ修理のため回送されました。

後で知ったことですが、同じ船団の仲間は鹿児島から沖縄あたりで全部沈められたとのことに驚くと同時に、一命が助かった幸運に感謝しました。

「タスマニア丸」は修理のため、五島列島を通過し有明海に進入した時には故郷の島原市を目前にして、生きて帰る日を願っていました。

三池港での修理も終わり、次の船団で南下しましたが、台湾付近で、今度は空襲騒ぎ。そして基隆から高雄港へ南下し、ここが日本の最後の土地でした。ここで我々が乗ってきた「タスマニア丸」の大修理が開始されました。この船は、もともと台湾の「バナナ運搬船」だったそうで、随分くたびれていたオンボロ船でした。

今回の事故の修理のために、船底の積荷を全部降ろしていましたが、これを見てびっくり、荷物の大部分が火薬類でありました。あの最も強烈な

爆薬だとは……。そしてこのボロ船が船団の中心部に位置していたのです。

台湾での生活は、僅かではあったが懐かしい。バナナや砂糖の特配があり何よりの喜びでした。

高雄では隊長と二人で上陸し、砂糖を麻袋一つを故郷の母親に送ったのですが、どう間違ったのか都合良く届いていたことを復員して初めて知りました。その時の母親は鼻高々だっただろうと想像します。

また隊長と二人で映画館に入り、「姉妹三人」という映画を見ましたが、懐かしかった。

船団は愈々魔のバシー海峡へ向かって南下する。ここには敵の潜水艦が待ち構えているから決して睡眠はしないで起きているようにとの通達がなされました。その夜は満月、恍々として夜景の美しい波は高波で、船尾が高く上がり、その都度スクリュウの回転が肉眼でもハッキリ見えました。

夜が更け、戦々恐々していると、予感通り船団の前後で続けざまに大爆発音がして次々と輸送

船が撃沈され、海面のあちこちで助けを求める声  
がして、手を振る光景が眼に映りました。この世  
の地獄とは、こんなものか……。

やがて夜は明けて、ここはフィリピンのある島  
の陰に船団は停泊する。昨夜の遭難者の救護をし  
ているとの事。初めて見る南の島の景色……。椰  
子の木の下に土地の人がいることもまた風景でし  
た。大きな海亀が、船から投げる残飯に集まりま  
す。

次は間もなくフィリピンのマニラ上陸だ。初め  
の街はどんな所か？ 街角のあちこちで中国人  
がこちらをジロジロと眺めているのはあまり感じ  
の良いものではありませんでした。宿舎は学校の  
講堂で、ここには各部隊混成で、特に輸送船沈没  
の遭難者が多くて、盗難事故が頻発していました。

マニラには三井物産の支店があり、私の叔父二  
人が勤めていたので連絡したら、市内は危険なの  
で郊外に疎開していました。弟の叔父が早速、面

会に来てくれ、お土産にバナナとアメリカ製の下  
着等を持参してくれました。バナナは台湾での支  
給品で充分満足していたので、歓迎しなかったの  
には叔父はガツカリしたようです。

兄に当たる叔父はミンダナオ島に行っているが  
戦争で消息不明だと聞き、民間人も大変だと思い、  
戦況は不利なんだと痛感しました。

郷土の学校の先輩でバスケットの仲間であった  
清水太平さんも、今日戦地に飛び立ったばかりで、  
おそらく帰還はむずかしいのではと耳にし愕然と  
しました。

マニラ駐留中も数回、空襲に会いましたが大し  
た被害もなく過ごすうちに、愈々最後の任地の指  
令が出ました。どこへ行くのか判らぬまま輸送船  
に乗り込みましたが、マニラ湾内は沈められた船  
のラストがここかしこと林立して、相当きびしい  
戦いがあったことを目のあたりにして南下しまし  
た。

乗船したのが長崎造船所で建造した中型客船「ブラジル丸」だったので親近感が湧き、若干安心感もありました。

ある夜、階段の下のベッドに寝ていたら突然「ドカン」との衝撃音、船内の警報が一齐に鳴り響き、火薬の匂いが充満してきました。「すわ！」と飛び起き、枕にしていた浮胴衣をしっかりと締め、甲板に駆け上がると、幸いにも魚雷の不発弾で船は大丈夫でした。

空と海との数度の危険から逃れ、やっと上陸して司令部へ命令受領の任を受けた時の安堵感は数十年を経た現在でも忘れません。

どの方向に司令部があるのか、数人の兵と共に不安のなか、けたたましい鳥の鳴き声に驚きながら、やっと司令部を探し当て命令受領を待ちます。受けた第一声が「よく着いたナ」には愕然としました。

私達の隊長だった酒井少尉と現地指揮官がトラブルを起こし、酒井少尉が転任となり、今まで苦

労を共にした召集の老少尉のシヨンボリした姿には哀れさを感じました。新しく隊長になった将校も短期間で交替となり、残された兵隊だけで、徒歩でブルネイ王国のアピに到着しました。アピでの生活は世界一ともいわれる程の夕映えに故郷への想いに浸りました。現地人とのトラブルもなく、のんびりした毎日でした。

ブルネイ王国の住居に仲間と出向きました。立派な建物で、ある程度恐怖もあったので、おそるおそる部屋に入りました。十畳位もあるうかべツドに天井から吊るされている「カヤ」をたぐり、軍靴のまま寝転んでみました。

王室の建物よりの帰途、現地の結婚式に会ったので興味本意に見ることができましたが、物珍しい習慣に戦争にきているのか観光にきているのか、のんびりしたアピでの生活でした。

日常生活では風呂が無いので宿舎の横が川だったので日中、何回となく水浴に興じましたが余り

清潔とはいえませんでした。大、小便は川の側で用を足すようにトイレが設けてありました。今考えると、よくも川で泳いだものよと思います。

独立混成第七十一旅団長・山村兵衛少将の当番を命ぜられ、のんびりした生活とも別れ、閣下に行先はボルネオで一番高いキナバル山の山奥です（現地人を戦力に利用する目的）。

キャラバンは相当の人数で、ほとんどは現地人で構成され、閣下は乗馬で、他に二頭は荷物を載せ、手綱は私がありました。しかし子供の頃田舎で馬に蹴られたことがあります、その恐怖心が脱け切れず、手綱を長くして曳いていました。手綱を長くしたため馬の背がただれた状態になり治療をしてやった記憶があります。

途中、野宿をしたのですが、テントを張り食事の準備をした時のこと、高山であるので酸素の関係か火が着かなくて苦労した思い出があります。

キナバル山の標高が四、〇九四メートルもあることを復員後知り、火がつかなかったのもそのせいであつたと知りました。山奥の平らな土地に宿舎を設け、現地人の教育が始められましたが、私は専ら閣下の日常の世話で明け暮れ、現地語を覚えようと現地人を先生にしたこともありました。

そのうち閣下もいなくなり、私は山を降りてアピの仲間と再度行動を共にするようになりました。ある日、野菜不足のため山に入った仲間が、背の丈もある「長いも」が手に入ったので、島原出身の兵隊が炊事係として試食した時のことですが、口に入れたと同時に「痙攣」を起こし即死でした。全員驚いたものです。あとで現地人に聞いたところ、吹矢につける猛毒だとのことには吃驚しました。

そのうち転進の命令により、十人単位で一人責任者をきめ、海岸線を毎日行軍に次ぐ行軍となりました。武器は短剣三人、現地人が使用する蕃刀を七人、これで戦うことができるのか？ と疑い

ながらでした。

海岸線を夜間進むことにしたのは、現地の蕃人で、咽のところにランプのダイヤ型の入れ墨のあるダイヤ族と額に二本の赤色の入れ墨のイバン族が、昼間吹矢で闘うことがあったので夜間の行軍にした訳です。行軍中、犠牲者も無くすんだのは幸いでした。彼らも米軍の命令に従っての襲撃だったと思います。

行軍すること約一カ月で目的地クチンに到着しましたが、ほとんどの兵隊がアマーバ赤痢かマラリアを患っていました。私はアマーバ赤痢でマラリアだけはかからなかったので助かりました。

クチン市街から少し離れた場所に旅団の参謀部や副官部があつて、私は副官部の功績係を命ぜられました。戦況は良くなりB 29が頻繁に飛来し、その都度防空壕に待避する日が続きました。山村閣下の顔も防空壕の中で拝見することしばしばで、将棋の相手をさせられ、三回に一回は負けて御機嫌を取りました。

ますます戦況は悪くB 29が散布するビラを見た現地人の動向も悪くなってきました。昭和二十八年八月十五日雑音の中でようやく聞きとれた天皇陛下の敗戦の玉音放送に副官は割腹自殺、参謀長は参謀憲章をちぎり捨てたと聞きました。

新型爆弾で広島、長崎は全滅らしいとの情報が入りました。全員捕虜となり収容所に移動、工兵隊も合流して、数日して英国軍より使役を出すようにと通告がきました。初日のことで、どのような作業か判らず不安ではあつたが手を挙げて十人程を連れて指定の場所に行きました。

ちょうどユニオンジャック（英国の旗）の掲揚している場所に出合つたので一列横隊に整列して挙手の礼をしました。その状況を英隊長は見ていたのか好感を持って我々を優遇してくれました。私には個室に案内してくれてコーヒー、煙草と接待してくれましたので、私はパーカーの万年筆を進呈したら、隊長はペンダントの内を見せ帰還したら

結婚するんだと彼女の写真を見せてくれました  
(名前は失念しました)。

その後、数回使役に狩り出されましたが、前述の隊長とは別人の英軍人が日課のようにジープに乗って来ては、誰彼の区別なく使役の兵を鞭でワン、ツー、スリーと叩き散らすので、できる限り会わないように心掛けました。彼は自分の部下十何人かを日本人に殺されたと言う恨みだったそうです。

その使役たるや糞尿分離機内の掃除でしたが、永い間使用しなかったので固まってしまいスコップで砕いて運搬する作業でした。敗戦した以上止むを得ないことでしたが、大変辛い思いをしました。

昭和二十一年二月十日、内地帰還の朗報にホッとシボルネオのクチン港を出発しました。功績係をしていたので佐賀県、長崎県の戦友の遺骨六柱を持ち帰ることにしましたため、これで助かった、

変な話を最後に……。

戦友の英霊を首から白い布で胸元に下げているため、都合よくいけば検査も無事通過するのではないかと横着にかまえて、服のボタンというボタン全部を金(ゴールド)で作り替え、大竹港に上陸、検閲の兵士も全員英霊に最敬礼という有様でした。

新型爆弾が投下された長崎の地だし、故郷の私鉄も運行しているのか心配でしたが、何事もなく長時間かかって故郷の島原に着いた時の喜びはひとしおでした。

家には母ひとりだったので私の足をとりさすりながら「生きて帰ったのだ」と喜ぶ母の姿に涙が出ました。傍らに見知らぬ人がいるので尋ねたところ、ミクロネシアのトラック島に渡っていた伍一郎さんでした。この方は私の祖父の弟で、学校を卒業してすぐ南洋群島に渡り、現地人の酋長の娘と結婚してトラック島で働いていたそうです。敗戦で強制送還されて身を寄せていたのでした。



食糧難で米もまともに食べられないと思い、小学校時代の友人に連絡をとり、持ち帰った金のボタンと交換するという話をしますと、近くに警察もあるし大変なことだからと何度も断りを受けました。しかし無理にお願いをして米五俵を玄関の土間に山積みさせた記憶があります。

勿論、母の喜びは大変なものでした。無事帰還し、前職の私鉄の仕事にも復職でき、最終的には健康で八十四歳の高齢まで生き延びている毎日です。

平和がいかに大事かということを感じております。